

Newsletter

Center for Research on the Dynamics of Civilizations

編集・発行：岡山大学大学院社会文化科学研究科附属文明動態学研究センター

発行日：2019年10月31日

Vol. 02
Oct. 2019

倉敷考古館との協定

公益財団法人倉敷考古館と学術連携に関する協定を6月21日、締結しました。

この協定では、岡山大学と倉敷考古館が、双方の所蔵資料を中心とした研究を進めることにより、展示および学生教育の充実・発展を図り、地域への貢献を図ることを目的としています。

文学部会議室で行われた調印式では、鈞雅雄大学院社会文化科学研究科長が協定書の概要を説明した後、大原謙一郎倉敷考古館理事長と榎野博史学長が協定書に署名しました。榎野学長は「本学と倉敷考古館が保有する、質、量ともに優れた遺産の価値が高まるよう、いろいろな形で連携していきたい」と話しました。



協定書に署名し、握手する榎野学長(左)と大原理事長

また午後からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の平川南機構長による記念講演「人文学の新たな展開—博物館と大学の連携—」も開催され、榎野学長、大原理事長をはじめ、多くの教職員、学生らが聴講しました。

地域史研究プロジェクト進行中

このたび、特別推進研究(R1~R5)「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表:神戸大学教授奥村弘)が採択され、災害時の文化財レスキューである史料ネット活動で培った地域歴史資料学をふまえ、災害文化を内包した地域社会形成史を通史的に見通すプロジェクトがはじまりました。

五年をめどに、新しい人文学の方法、地域社会形成史を二つの柱に「災害文化と地域社会形成史」研究会を組織し、これまでの地域歴史資料学、Digital Humanities・GIS・理化学分析・古気候学・災害科学・生命科学などが伝統的な歴史学や考古学にどのようなインパクトを与えるのか、新しい学問の可能性を追求するとともに、人類が災害や環境とどのように対峙・適応してきたのか、地域に即して把握しようと考えています。

11月9日には第2回「災害文化と地域社会形成史」研究会を岡山大学で実施します。

第2回
「災害文化と地域社会形成史」研究会 (特報C欄)

2019年11月9日(土) 13:00~17:00
於: 岡山大学文化科学系総合研究棟2階
聴演2号室 (岡山大学文化科学系総合研究棟2階)

報告:
1. 天田健文 (神戸大学) 「環境・災害からみた播磨千種川流域の歴史と明治25年徳島・兵庫・岡山3県の台風被害」
2. 村井良介 (岡山大学) 「戦国期における地域秩序形成をめぐって」

欧州との共同プロジェクト「BE-ARCHAEO」進行中

岡山大学とトリノ大学(イタリア)を代表とする欧州の研究機関・企業との共同プロジェクト「BE-ARCHAEO(考古学を超えて)」が進んでいます。

8月17日から9月7日の日程で約30名のヨーロッパ研究チームが岡山を訪れ、総社市鳶尾塚古墳の共同発掘調査や、学内所蔵考古資料の分野融合的調査を実施しました。

鳶尾塚古墳は直径23m程度の円墳で、長さ12.5mの横穴式石室を埋葬施設としています。これまで考古学研究室の測量調査以外に調査は行われておらず、墳形や時期の確定は行われていませんでした。発掘調査は、清家章教授を中心とする考古学研究室の研究員・学生チームに、イタリア・ポルトガルの考古学者が加わり、生物学者によるサンプリングも行われました。2019年度は墳丘に2本のトレンチを設定し、さらに石室玄室部の調査を行いました。今年度は墳形の確定には至っていませんが、墳丘西側の墳端を確認しています。石室は、大量の土砂が流入しており、その土を取り除いたにすぎませんが、それでも須恵器片・土師器片・鉄鏃片・釘片などの遺物が出土しています。

化学、物理学、生物学などの多様な分析技術と知見をもつ研究者による学内所蔵考古資料の自然科



鳶尾塚古墳石室内の調査

学的分析も本格的に始まりました。岡山市埋蔵文化財センター、島根県埋蔵文化財センターにもご協力いただき、古代の吉備と出雲に関する考古資料の調査・分析を進めています。



鳶尾塚古墳出土資料を検討する欧州チーム
調査の状況はドキュメンタリーとして記録されます。



鳶尾塚古墳の発掘調査
トレンチ調査により墳丘の形状を確認します。



二万大塚古墳出土ガラス玉の自然科学的分析
発掘調査を実施した新納泉名誉教授も交えたディスカッション。理学部野坂研究室にて。

歴史資料保全活動進む

1995年1月の阪神淡路大震災を契機に、災害で地域の歴史資料が失われることを防ごうという史料ネットワーク運動が始まりました。災害時には多くの文化財が被害を受けますが、とりわけ行政的指定制度の網にかからない、民間所蔵の文化財が失われることが多くあります。これらも地域の歴史を明らかにする上で重要なものなのですが、こうした地域の歴史資料を少しでも残し活用することで、復興や町作りに役立てたいという運動です。

その後、日本の各地で地震や洪水などの災害が発生し、こうした史料ネットワーク組織は拡大してゆきますが、災害発生後に文化財レスキューの取り組みを組織するのでは対応が後手に回ることも多いため、事前に予防的にネットワークを作って準備しておこうと、2005年に岡山史料ネットワークが立ち上がります。

史料ネットワークの活動の大きな特徴は、市民ボランティアによるレスキュー活動と大学での地域歴史資料の研究が有機的に連携しているところにあり、大学が研究と活動を担える人材の教育を担い、活動の実践は市民とともに行います。文明動態学研究センターは、そうした地域歴史資料の保全と活用についての研究、地域史研究と岡山史料ネットワークというボランティア組織と連携する結節点としての役割を果たしています。

現在、2018年の西日本豪雨により被災した倉敷市真備町の約2000点にのぼる個人宅の文書の修復・整理作業を市民ボランティアとともに進めています。岡山県・岡山県立博物館と連携し、企業メセナの助成金を受けて、地域のお堂に伝わった仏像を地元の仏師さんに修復してもらったり、地域の画師が描いた屏風を地元の表具師さんに修復してもらうなど、関係する多くの方々とつながる中でさまざまな地域歴史資料の保存に取り組んでいます。

1) 被災古文書の洗浄



水損資料は腐敗を防ぐために冷凍保存され、作業時に常温解凍したものを1枚ずつ離していきます。



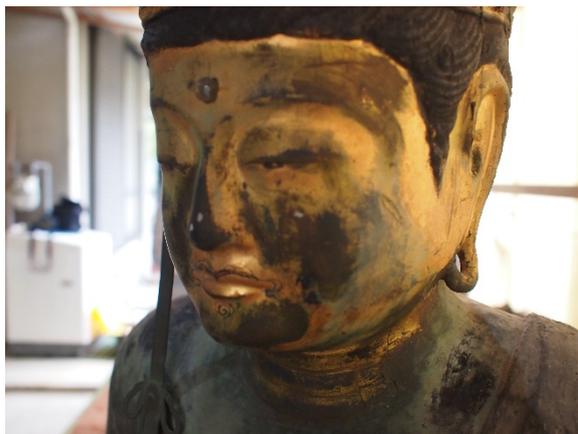
ボランティアのみなさんと作業

2) 修復の完了した屏風



真備町の旧家に伝わった屏風、地元へ返却の予定。

3) 大日庵の仏像



岡山県・岡山県立博物館と連携してレスキュー。平安時代末に制作され、修復を重ね地域で大切に伝えられてきたもの。

引き続きご協力をお願いいたします。

文部科学省科学研究費助成事業
新学術領域研究(研究領域提案型)

2019年度～2023年度

「出ユーラシアの統合的人類史学—
文明創出メカニズムの解明—」
キックオフ・ミーティングが開催されました。

今年度より、岡山大学大学院社会文化科学研究科・松本直子教授を代表として、文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究(研究領域提案型)「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明—」(2019年度～2023年度)のプロジェクトが開始されました。

本プロジェクトは、ユーラシア大陸を出て人類が拡散した日本列島、アメリカ大陸、オセアニア地域の比較研究から文明創出のメカニズムを明らかにしようとするもので、考古学的に確認できる長期的な文明形成の比較研究を核としながら、認知科学、自然人類学、分子人類学など多くの分野を包摂する文理統合的な研究です。このプロジェクトは文明動態学研究センターに本部を置き、国内外の40を超える研究機関の研究者が分担者・協力者として参画します。また、現在は公募研究を募集しており(※2019年10月末日現在)、今後も本プロジェクトのさらなる充実を図っていきます。

5年に亘るこのプロジェクトの始動に伴い、去る9月8日に岡山大学文法経講義棟10番教室でキックオフミーティングが開催されました。キックオフミーティングでは、領域全体の概要と、各班の計画研究の内容について発表がなされました。メンバー以外にもおよそ60名の参加者があり、フロアも含めた活発な議論の場となりました。プロジェクトの概要および



岡山大学で開催

進展については、領域のウェブサイトをご覧ください。

キックオフ・ミーティングの動画も公開しています。

<http://out-of-eurasia.jp/>

今回の全体会議は1月11日、12日に南山大学で開催される予定です。テーマは「ドメスティケーション・土器・社会複合化・モニュメント:出ユーラシア地域の文明形成プロセスの比較」です。一般公開の会議となっておりますので、奮ってご参加ください



松本領域代表より概要説明



キックオフ・ミーティングでの議論の様子

メディア PICK UP

6月22日、山陽新聞で岡山大と倉敷考古館の連携協定について取り上げられました。

6月27日、山陽新聞に真備の豪雨で被災した平安時代後期に製作された仏像2体の修復が進んでいる様子が掲載されました。また8月16日には朝日新聞に掲載されました。